

さく かたやま さん

え. エル すみえし と はな はな さん

サンタクロースのおすねもの



クリスマスの朝のできごと

クリスマスイブ。

世界中の子どもたちは、サンタクロースが来てくれるのをとても楽しみにして眠りにつきます。

わくわくしながら、ドキドキしながら、ベッドの横につるした靴下を何度も確かめて、そうっと目を閉じるのです。

朝になったらきっと、素敵なプレゼントが入っていると信じて、ね。

くまたもそうでした。ベッドの横に大きな靴下をつるして、いっしょうけんめい目をつぶって眠りました。

夜の間、サンタクロースはやってきたでしょうか。

クリスマスの朝。くまたはいつもより早く目を覚ましました。

ドキドキして、とっても眠ってなんかいらなかったのです。

「サンタさん、ぼくのうちにも来てくれたかなあ」

そうっと靴下に触ると、とても大きな箱が入っているのがわかりました。

「やったあ！ サンタさん、来てくれたんだ！」

くまたは急いで箱を抱えて、居間に降りて行きました。早くお母さんに教えたかったのです。

。

居間には大きな暖炉がありました。暖炉の前には、くまたがお父さんやお母さんといっしょに飾りつけた大きなクリスマスツリーが置いてあります。

「サンタさん、このツリーも見てくれたかな」

キラキラ光るツリーをうっとり見ていたくまたは、ツリーの下に何か落ちているのに気が付きました。

「あれ？ これ、なんだろう」

恐る恐る持ち上げてみます。それは白くて、ふわふわした毛のかたまりでした。

「これ、ひげみたいだなあ……」

いったいなぜそんなものがツリーの下に落ちているのか、くまたは不思議に思いました。



「おかあさん、こんなものが落ちてたんだけど」

くまたは台所にいるお母さんのところへ、その白いものを持って行きました。

「あら、なにかしら、これ」

お母さんはちょっと気味悪そうな顔をしました。

「これ、……もしかしたら、サンタさんのひげなんじゃないかなあ」

「サンタさんの……ひげ？」

「うん。だってほら、こんなに長くてふわふわしてるんだもの。ぼく、絶対サンタさんのひげだと思うな」

「でも、サンタさんがひげなんて落としていくかしら」

お母さんは首をかしげました。確かに、サンタクロースがひげを落としていくなんて、聞いたこともありません。

「わかんないけど。でも、これ絶対サンタさんのひげだよ」

見れば見るほど、もうどうしたってサンタクロースのひげにしか見えなくなってきました。くまたはドキドキしてきました。だって、サンタクロースがぼくの家で落とし物をしていくなんて。

「いったい、何を騒いでいるんだ？」

くまたの声を聞いて、お父さんが起きて来ました。くまたは急いでおとうさんにひげを見せます。

「おとうさん、ほら、これを見て。これ、サンタさんが落としていったひげだと思うんだ」

「どれどれ」

お父さんはひげを手にとって、じっくり調べてくれました。

「うーん。確かにひげのようだなあ。しかし、サンタさんのものだという証拠はどこにもないぞ」

「だって、ツリーの下に落ちてたんだよ！ ゆうべ、ぼくのところにプレゼントを届けに来て、ツリーを見てる時に落としたんだよ、きっと」

「うーん」

お父さんはしきりに首をひねっています。お母さんも不思議そうな顔をしています。

でもくまたは、どんどんその思いが強くなってきました。どうしてひげだけ落ちていたのかはわかりませんが、でもこれはサンタさんのひげに違いないのです。

「そうだ！ ぼく、サンタさんのところへ返しに行ってくる。サンタさん、きっと困ってると思うんだ。ねえ、いいでしょ、お父さん、お母さん」

くまたの言葉にびっくりしたお母さんは、

「まあ！」

といったきり黙ってしまいました。

お父さんはしばらく考えていましたが、やがて真面目な口調で言いました。

「そうだね。これがサンタさんのひげなら、きっとサンタさんは困ってるだろう。くまたはサンタさんを助けたいと思ったんだね？」

「うん」

「それなら行っておいで。くれぐれも気をつけて行くんだよ。サンタさんの家はわかるのかい？」

「あ、そうか。ぼく、知らないや。でも、きっと誰かが知ってると思うんだ。だから、教えてもらいながら行くよ」

くまたの決意が固いことを知ったお母さんは、ひげを入れる袋を出してくれました。

「ちゃんとこれにしまっ、落とさないように気をつけるのよ」

「わかった。ありがとう、おかあさん」

「気をつけてね」「がんばれよ」

お父さんとお母さんが手を振って見送ってくれました。

くまたも、大きく手を振ります。

「行ってきまーす」

くまたは、はりきって出かけました。

最初の案内



家を出たくまたは、元気よく歩いて行きます。

やがて、森が見えてきました。森に入って行くと、木の上からホーホーという声が聞こえてきました。

「だれだろう」

くまたが見上げると、枝にふくろうのおじさんが止まっているのがみえました。

「こんにちは、ふくろうのおじさん」

「こんにちは、くまた。どうして1人で歩いているのかね？」

「ぼくね、サンタさんのお家へ行かなくちゃならないんだ」

「ホー、サンタクロースの家に行こうというのか。くまたはサンタクロースの家がどこにあるのか知っているのか？」

ふくろうのおじさんの問いかけに、くまたは残念そうに答えました。

「ううん、知らないんだ」

「ホーホーホー」

ふくろうのおじさんはひどくおかしように笑いました。

「どこに家があるのか知らないのに、行こうというのかね？」

「うん、そうだよ。ぼく、どうしても行かなくちゃならないんだ」

くまたがあんまりきっぱり言うものですから、ふくろうのおじさんは黙ってしまいました。

「あのう……」

黙っているふくろうのおじさんに向かって、くまたが言いにくそうに声をかけました。

「ふくろうのおじさんは、サンタクロースの家がどこにあるのか、知ってますか？」

「ホーホー、さあね。詳しくは知らないよ」

「でもちょっとは知ってるの？ もし知ってるなら教えてよ」

「誰かに何かを教えてほしいときは、もっとていねいに言うものだ」

ふくろうのおじさんは、ちょっとこわい顔をしました。くまたは急いで言い直しました。

「ふくろうのおじさん。もし、サンタさんのお家がどこにあるか、知ってたら、どうぞ教えてください」

そう言って、ぺこりと頭を下げました。それをみたふくろうのおじさんはようやく機嫌を直してくれました。

「わしが知っているのは、サンタクロースは遠い北の国に住んでいるということだけだ。この森を抜けて、ずっとずっと北の方へ向かっていけば、たぶん着くのではないかと、わしは思っておる」

「そうなんだ……。遠い、北の国なんだね。ぼく、ぼく、行けるかな」

遠い国だと聞いて、急にくまたは不安になってきました。こんな小さなくまたが、果たしてそんな遠くまで行けるのでしょうか。

「いったい、そんな遠くまで何をしに行こうというのだね？」

ふくろうのおじさんは不思議そうに尋ねました。そのとたん、くまたは自分がすべきことを思い出しました。

「ぼくね、サンタさんの忘れ物を届けに行かなくちゃいけないんだ。ふくろうのおじさん、教えてくれてありがとうございました。ぼく、がんばってみるよ」

「道がわからなくなったら、誰かに尋ねてごらん。ていねいに聞くことを忘れずにな」

「うん。そうします。ほんとうにありがとう」

元気を取り戻したくまたは、大きな声でふくろうのおじさんにあいさつして歩き出しました。サンタさんはきっと困ってる。なんとしても、このひげを届けてあげなくちゃ。

くまたは力強く歩いて行きました。

うさぎのお姉さん



ふくろうのおじさんと別れてしばらく歩いていると、うさぎのお姉さんに会いました。

「こんにちは、くまたくん」

「こんにちは、お姉さん」

「ひとりなの？ どこかへお出かけ？」

「うん、ぼく、ちょっと遠くまで行かなくちゃいけないんだ」

「まあ」

うさぎのお姉さんは、くまたがひとりで遠くまで行くと聞いて、とても驚きました。

「いったい、どこまで行くの？」

「あのね。サンタさんのところまで行くんだ。ぼく、サンタさんの忘れ物を届けに行くんだよ」

「えらいのね、くまたくん」

お姉さんにほめられて、くまたはちょっと照れくさくなりました。だって、ふくろうのおじさんから、サンタさんの家はとても遠いところにあると聞いて心細くなっていたからです。

「私も同じほうへ行く用事があるから、途中まで一緒に行ってもいいかしら」

「もちろんだよ」

くまたは喜んで答えました。心細くなっていたことはお姉さんには内緒です。

くまたはお姉さんと並んで歩き始めました。

うさぎのお姉さんはとてもきれいなので、なんだかすごくウキウキしてきます。

そんなふたりの様子を、少し離れたところからきつねのお兄さんがじっと見ていました。そして、そおっと近づいてきました。



「よお。おふたりさん。どこへ行くんだい？」

きつねのお兄さんがそう言って近寄って来ました。

「あ、私はこっちの方へ行くから」

うさぎのお姉さんはちょっと嫌そうな顔をして、急いで離れていってしまいました。

このきつねのお兄さんは、悪いきつねではないのですが、どうも相手が嫌がることを言ったりしたりするくせがあって

、うさぎのお姉さんはいつも、きつねのお兄さんの姿を見るとどこかへ行ってしまいうのです。

くまたは、サンタさんのところへ行かなくてはなりませんから、逃げるわけにはいきません。しかたなくそのまま歩いていると、きつねのお兄さんがくまたのそばへやってきました。

「また、うさぎちゃんはどこかへ行っちゃったな。つまんねえの。ところでくまた、おまえはどこへ行くんだ？」

「ぼく、ぼく、サンタさんのところへ行くんだ」

「サンタクロースの家だって？ そいつはおもしろそうだな。よし、おれもいっしょに行つてやるよ」

ほんとうは嫌だと言いたかったのですが、うっかりそんなことを言ったりすると、きつねのお兄さんはすごく怒るのです。だからくまたは黙ってきつねのお兄さんといっしょに歩くしかありませんでした。

「サンタクロースの家か」

「きつねのお兄さんは、サンタさんの家がどこにあるか、知ってるの？」

もしかしたら知っているかもしれないと思って聞いてみたのですが、お兄さんはあっさり首を振りしました。

「おれは知らない」

くまたはがっかりしました。すると、そんなくまたのようすを、面白そうにながめていたお兄さんが、もったいぶった言い方で言いました。

「でもな。おれは道を知ってるオオカミと友だちなんだよ。だから、そのオオカミのところまで連れて行ってやる」

「ほんと?! すごいや。ありがとう、お兄さん」

いやだななんて思って悪かったとくまたは思いました。

それからふたりはいっしょに歩き始めました。でもきつねのお兄さんはくまたが持っている袋をひっぱったり、中からひげを取り出そうとしたりと、いたずらばかりします。

「へへーん、なんだこれ。きたない袋だな」

「汚くなんかないよ。お母さんが持たせてくれた大事な袋なんだ。あ、ひげにさわらないでよ」

「なんだかごわごわして、変なひげだな」

お兄さんがオオカミと友だちでなければ、今すぐにでも走って逃げ出したいと思いました。
でも、オオカミのところへ着くまではがまんしなくてはなりません。
大切に袋を抱え込んで、くまたは一生懸命歩きました。

やがて、遠くの方に、オオカミらしき姿が見えて来ました。

「あのオオカミさんと友だちなのか？」

「え？ あ、ああ、そうさ。でも……おれ、ちょっと用事を思い出した。ここまで来たら、おまえももうひとりで行けるだろ？ 真っすぐ行って、あのオオカミに自分で聞いてみな」

そういうが早いか、きつねのお兄さんはくるっと向きを変えて、森へ帰ってしまいました。

くまたは困ってしまいました。きつねのお兄さんがオオカミと友だちだというのは、どうやらウソのようです。

「しかたがない。自分で聞いてみよう。そうだ、ていねいに聞いたらきっと教えてくれるよ」

ふくろうのおじさんが教えてくれたことを思い出して、くまたは勇気を出してオオカミの方へ近づいて行きました。

オオカミに会う

「こ、こんにちは」

くまたは、恐る恐るオオカミに声をかけました。オオカミはとても大きく、怖そうに見えたからです。

「うん？ おまえはだれだ」

「ぼく、くまたっていいです。あの、きつねのお兄さんが……」

そうやって、きつねのお兄さんが逃げていった方を見ると、オオカミはううっとうになりました。

「なに？ きつねのやつがいたのか」

「はい。でも、どこかへ行っちゃいました」

「また逃げたな。まったくしょうがないやつだ。それで、どうしておまえはあのきつねを知ってるんだ？」

「ぼく、サンタさんのところへ行かなくちゃいけないんですけど、きつねのお兄さんはオオカミさんが道を知ってるって言ったんです。だからそこまで一緒に来たんだけど」

「やつは逃げてしまった、というわけか」

「はい」

くまたは、オオカミが怒ったらどうしよう、と心配になりました。どうやらきつねのお兄さんは、オオカミによく思われていないみたいだからです。そんなきつねのお兄さんと一緒にいたのだから、くまたも仲間だと思ったりしないでしょうか。

「で、おまえはサンタクロースのところへ行くというのか？ それはいったいどうしてだ」

オオカミの目は、思ったほど怖くありませんでした。くまたはちょっと安心して、オオカミにひげを見せました。

「これを、おまえひとりで届けに行くというのか」

「はい。サンタさんはきっと困ってると思うんです」

くまたの答えを聞いて、オオカミはしばらくだまって考えていました。

やがて、にこっと笑うとくまたに言いました。

「よし、おれの背中に乗りな。途中まで送って行ってやるよ」

「え？ほんとに？ ありがとう、オオカミのおじさん」

くまたはオオカミの背中によじのぼりました。オオカミの背中はごわごわした毛におおわれていて、おしりのあたりがチクチクしました。

「しっかりつかまってるよ」

オオカミンはそういうと、いきおいよく走り出しました。

くまたの耳元で風がびゅんびゅんうなります。まわりの景色が雲のようになって流れて行きました。

くまたは、自分まで風になったようでした。



やがて陸地の果てまできました。

「おれが連れてきてやれるのはここまでだ。あとはあいつに頼もう」

そう言って、海に向かって叫びました。「おーい、アザラシ！」

海を渡るくまた

オオカミの呼ぶ声にこたえて、海の中から大きなアザラシが姿をあらわしました。

「おほーい、なんだい、オオカミ」

「この子をサンタクロースのところまで連れて行ってやってくれないか」

「おほー、サンタクロース」

「お願いしまーす」

くまたも大きな声で頼みました。

「わかったよー。まかすといてくれ」

くまたは、海に落ちないように気をつけながら、アザラシの上に登りました。つるつるして滑り落ちそうです。

「じゃあ、頼んだぞ」

「オオカミのおじさん、ありがとう」

くまたは岸辺のオオカミにお礼を言いました。

「気をつけていきな」

オオカミは照れくさそうに笑いました。

「さあ、いくよー。しっかりつかまっててくれよ」

「はい」



アザラシはバシャッと水を打つと、すいすいと泳ぎ始めました。氷の混じった冷たい海の水がぴちゃぴちゃとはねています。アザラシは、くまたを落とさないように、とても上手に泳いでいきます。

果てしない海をひたすら泳いでいきました。くまたはだんだん寒くなってきましたが、じっと我慢していました。

すると突然アザラシが叫びました。

「だめだだめだ、こんなスピードじゃ、いつまでたってもつかないよ」

そして空に向かって大声で叫びました。

「おお〜い、かもめや〜い、助けてくれよ〜」

くまたはびっくりしました。

「どうしたの、アザラシのおじさん」

「海の上に顔を出して泳いでいたらスピードが出せないんだ。でも、もぐったらお前が溺れちゃうだろ。だから、ともだちのかもめを呼ぶのさ」

くまた、空をとぶ



アザラシの呼びかけで、1羽のかもめが降りて来ました。

「どうしたの、アザラシさん」

ふわりふわりとアザラシの近くを飛びながらかもめが聞きました。

「きみは、サンタクロースの家を知ってるかい？」

「知ってるわよ。去年、サンタさんのところのトナカイさんと友だちになったのよ」

「そうか、よかった。それじゃあ、すまないが、この子をそこへ連れて行ってやってくれないか」

「いいけど、どうして？」

くまたは急いで言いました。

「ぼく、サンタさんのところへ届け物があるんです。お願いします」

「まあ、そうなの。わかったわ。わたしの背中にお乗りなさいな」

くまたは、落ちないように気をつけて、かもめの背中に乗り移りました。

「よかったな、ぼうや。気をつけていくんだよ」

「ありがとう、アザラシのおじさん」

「行くわよ。しっかりつかまってね」

くまたを乗せたかもめは、大きく羽ばたいて空へ舞い上がりました。

みるみるうちに、アザラシが小さくなっていきます。くまたの耳元で風がうなりました。

下を見ると、目が回りそうな高さです。くまたはぎゅっとかもめの首にしがみつきました。

あっという間に山を越えていきます。

しばらく飛んでいくと、やがてかもめは下へ降り始めました。

遠くの方に、白い雪のつもった小さな小屋がみえました。どうやらあれがサンタさんの家のようです。

いよいよサンタさんに会えるんだ、と思うと、くまたはドキドキしてきました。

サンタさんの家につく

かもめはゆっくりと地面に降り立ちました。くまたもかもめの背中から降りました。

家の前にはトナカイが立っていて、こっちをじっと見ています。

「こんにちは、トナカイさん。お久しぶりね」

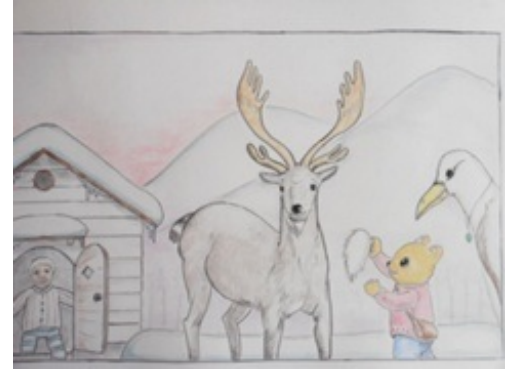
「こんにちは、かもめさん。いったいどうしたんだい？」

「この子がサンタさんに用事があるんですって」

それを聞いて、トナカイは大きな目でくまたを見つめました。くまたは急いで袋からひげを取り出し、トナカイに見せました。

トナカイはしばらくひげを見つめたあと、家の方に向かって呼びかけました。

「サンタさん、お客さんですよ」



すると、ドアが開いて、ひとりのおじさんが顔を出しました。

「お客さんだって？」

そのおじさんの髪の毛は真っ白で、とてもやさしそうな目をしていました。でも、あごには、ほんのちょっとしかひげがありません。

くまたは思い切り大きな声で言いました。

「こんにちは！ サンタさん。ぼく、サンタさんのひげを持ってきたんです！」

「ひげを持ってきてくれたんだって？」

おじさんは大急ぎでくまたのところへやってきました。そしてひげを受け取ってうれしそうに笑いました。

「おお、これはたしかにわしのひげだ！ よかった、どこでなくしたかわからなくて困っていたんだよ。ありがとう、ありがとう」

サンタさんはそう言って、くまたの手を握ってぶんぶんと振りました。

それから、初めて気がついたように言いました。

「おや、きみはひとりできたのかい？」

「はい。あ、あの、ぼく、くまたっていいです。ここまではかもめのお姉さんに連れてきてもらったんです」

「そうかそうか。とにかくありがとう。どうか中へ入って、あたたかいお茶を飲んでいってくれ」



サンタさんはくまたに温かいシチューを出してくれました。温かい飲み物も出してくれました。

くまたは寒さに凍えていて、おまけにお腹もすいていたので、お礼を言ってたくさんごちそうになりました。

お茶を飲みながらサンタさんは、ひげをなくした話をきかせてくれました。

「いやもう、とにかく、気がついたらひげがなくなっていてね。いったいどこでなくしたか全然わからなかったんだよ。でも、ひげを探している時間がなくて、しかたなくそのまま帰ってきたんだよ」

サンタさんはそこで照れくさそうに笑いました。

「そもそもどうしてひげを落とすようなことになったかというとな。クリスマスのプレゼントを配りに行く支度をしているときに、ひげの手入れをしていたんだよ。自慢のひげだからね、ていねいにくしをいれていたんだ。そしたら、一箇所、くしゃくしゃに固まっているところを見つけってしまったんだ。どうやってもほどけないから、はさみで切ろうとしたんだが、どういうわけか手元がくるって、ぱっさりひげを切り落としてしまったんだよ」

「ええー、それはたいへんじゃないですか」

くまたは目を丸くしました。

「そうなんだ。まったく面目ない。一度はひげなしで行こうかとも思ったんだが、それだとそりで飛んでいる間じゅう、あごが冷たくてたまらない。だから、なんとか落としたひげをくっつけていったんだ。うまく行ったと思っていたんだが、やっぱり落ちてしまったんだなあ。いったいどこに落ちていたんだい？」

「ぼくの家、クリスマスツリーの下です。サンタさん、あのツリー見てくれましたか？ ぼくとお父さんとお母さんでいっしょけんめい飾ったの」

「もちろん見たとも。あんまりきれいだったから、顔を近づけて見てたんだよ。じゃあ、そのときにひっかかって落ちたのかもしれないな」

サンタさんがあのツリーを見てくれたことがわかって、くまたはうれしくなりました。

「それはそうと、きみはひとりでどうやってここまできたのかね？」

「みんなが助けてくれたんです。ふくろうのおじさんは、サンタさんの家がある方角を教えてください、うさぎのお姉さんは一緒に歩いてくれました。きつねのお兄さんも、オオカミのおじさんのことを教えてください、オオカミのおじさんは海の近くまで背中に乗せてくれました」

「海はどうしたんだね？」

「海にはオオカミのおじさんの友だちのアザラシのおじさんがいたんです。アザラシのおじさんは、ぼくがおぼれないようにずっと海の上に出て泳いでくれたの。でもそれだとスピードが出ないからって、かもめのお姉さんに頼んでくれたんです」

「私は、たまたま去年、トナカイさんとお友達になってましたからね。この場所まで来るのなん

て簡単なことでしたよ」

かもめはちょっとだけ自慢そうに言いました。トナカイもくすぐったそうな顔で笑っています。

「そうかそうか。みんなのやさしい気持ちのおかげでわしの大事なひげが戻ってきたというわけだな。ほんとうにうれしいことだ。そしてなにより、くまたくんの勇気とやさしさがいちばんありがたいよ。よく届けてくれる気持ちになってくれたね。ほんとうにありがとう」

サンタさんに喜んでもらえて、くまたはもっとうれしくなりました。家もわからなかったけど、がんばって届けに来てほんとうによかったと思いました。

くまた、家に帰る



サンタさんの話を聞いたり、かもめやトナカイと楽しく話しているうちに、あっという間に時間が過ぎて行きました。そろそろくまたは家に帰らなくてはなりません。

でも、どうやって帰ったらいいんだろう、とくまたが困っていると、サンタさんが言いました。

「帰りはそりで送ってあげよう。ほんとうはイブの晩にしか飛ばないんだが、ひげを届けてくれたお礼だよ」

「え！ ほんとに？ すごいや！」

くまたは飛び上がって喜びました。サンタさんのそりに乗れるなんて、なんて素敵なんですよ。

いつもはプレゼントを積んでいるところにくまたは座りました。寒くないように毛布にくるまっています。

「じゃあ、いくよ」

サンタさんがそう言うと、そりがふわっと空に浮かびました。と思うともものすごいスピードで、滑るように飛び始めました。くまたは「すごい、すごい」と大声で叫びました。

あっという間にくまたの家が見えてきました。

「早いんだね」

くまたはちょっぴり残念でした。せっかくのサンタさんのそりですから、もう少し乗っていたかったのです。

でも、家の近くまで来ると、お父さんとお母さんが大きく手を振っている姿が見えてきました。

「あ！ おとうさーん、おかあさーん」

くまたは夢中で手を振りました。

「おかえりー、くまたー」

「よくがんばったなー、えらいぞー、くまたー」

帰り際、サンタさんはくまたにウインクして、こっそり言いました。
「来年はひげを落とさないように気をつけるよ」